

第2次大戦中のアメリカで原子爆弾開発のマンハッタン計画が極秘に進行していたころ、アメリカ政府は情報戦略として、原爆の製造方法そのものよりも、原爆ができたという事実を徹底して秘匿しようとしたそうです。なぜでしょうか。敵国のドイツでも日本でも科学技術の水準は十分で、すぐにも原爆を作る力はあった、ただ本当にできるのかどうかそれがわからないから、どこまで研究が進んでいるか、研究者は闇の中にいる。だからその闇を照らす力となる、原爆ができたという事実をトップシークレットとしたのです。

哲学者の柄谷行人はこの歴史の証言を元に、「どうすればできるか」という中身よりも、「できる」「可能だ」という事実の方が、何か困難なことを成し遂げようとする人間にとっては、決定的に重要であると断言します。他にもスポーツの世界で、到底破れないと思われていた世界記録の壁が、一旦だれかに破られると、すぐにその壁を破る選手が続々と出る例を挙げています。陸上に詳しい人は、男子100mの10秒の壁を日本で初めて桐生選手が破ったときにも、続く日本選手がいたことを思い出すかもしれません。頑張ればいつかはできるようになると努力目標を立てても、すぐにぐらついでしまうことはよくあります。それに対し、高い目標に挑むライバルや仲間が「できた」「破った」「解いた」という刺激によって与えられる、「自分もできるはずだ」という信念は確固たる力を持ちます。どんなに困難と思われることであっても、「あの人にできて自分にできないはずがない」という信念が、粘り強い努力や探究をあくまで継続する自分への動機づけになり、あるとき自分にも、待ち望んだ夢の実現の瞬間が訪れるのです。これが壁を破る、ブレイクスルーが続いて起こる理由だと、柄谷行人は言います。

先日の卒業式で、卒業生に向けてこのブレイクスルーの波・連鎖の話をしました。1、2年生の皆さんにも繰り返してお話しします。

最近、スポーツの世界で日本選手の世界的な活躍が続いています。少し前なら、絶対無理、夢のまた夢と思われた、例えば大谷翔平選手の成し遂げたような快挙が、野球だけでなく多くのスポーツで実現しているのはなぜだろうと思いませんか。練習方法の進化、プロ化や海外進出の活発化など環境の変化も大きいでしょう。しかし、私は、壁を破るブレイクスルーの連鎖・波が、今起きているのだと考えています。メンタル面で、あの人にできることが自分にできないはずがないという強い信念が、個々の選手の才能を磨く並々ならぬ努力を支え、不可能と思われたことを可能にしているのではないのでしょうか。そして、プロスポーツという特別な世界の中だけではありません。どこでも、牧南でも、ブレイクスルーの波は起きます。野球部の秋の活躍や、生徒会諸君によるいろいろな行事での新しい企画の成功を見ると、牧南でもブレイクスルーが少しずつ現実のものになっていると感じます。

来年度はもっと、一人一人が自分の限界を決めずに何かに本気で打ち込む、それぞれ目標が違ってもお互いの努力をリスペクトし合い、切磋琢磨が行われる、牧南をそういう学び舎にしませんか。牧南生一人一人のなかで、ブレイクスルーを起こしませんか。ブレイクスルーは連鎖を呼びます。来年度はみんなで「牧南ブレイクスルー」の年にしませんか。私はこう提案したいと思います。部活動でも、学業でも困難だと思っていた壁を破る経験を、牧南生の一人一人がどれだけするかで、牧南は大きく変わってくる、そう期待しています。

さて、最初に触れた原爆の開発ですが、今年のアカデミー賞でそのマンハッタン計画の中心人物を主人公にした映画『オッペンハイマー』が7部門で賞を取りました。ウクライナ戦争などの世界情勢が受賞の背景となったとも言われています。被爆国の日本人として『オッペンハイマー』に無関心ではられません。映画の日本公開は3/29からだそうですので、春休みに映画館に出かけてみてはどうでしょうか。以上で終業式の式辞を終わります。